

クレヨンしんちゃん

漫画「クレヨンしんちゃん」が世に現れてから20年以上が経過する。はじめは大人向けのコミック誌で連載され、2年後にはテレビアニメの放映が始まった。当初は、しんちゃんの行いが「お行儀がよくない」「言葉遣いが教育的でない」とかいう理由で、「子供にふさわしくない作品」として非難を浴び、PTAが抗議したり、子供たちに見せたくない番組として母親たちの猛烈な反撃に遭ったりしたが、視聴率はどんどん上昇した。さらに興味深いのは、単行本が世界20カ国語に翻訳され、1億部以上を売り上げていることである。なぜしんちゃんがこんなにも世界中の子供たちに受け入れられたのかというと、まず、しんちゃんの脱力ぶりが見事。それまでのアニメといえば、「正しい」キャラクターが活躍するものがほとんどであったのに対し、しんちゃんは常にゆるゆるのパワーではずしにかかる。特に母親がヒステリックに抑えつけようとする際のゆるゆるのパワー効果は絶大だ。つまり母親の枠に徹底的に収まらないきわめてラディカルなキャラクターなのである。

深尾 葉子

ふかお・ようこ 大阪大学大学院経済学研究科准教授。昭和38年、大阪府高槻市生まれ。大阪市立大学大学院前期博士課程東洋史専攻修了。大阪外国語大学地域文化学科助教教授などを経て現職。専攻は中国社会論、環境のグローバル・マネジメントなど。著書に『日本の男を喰い尽くすタガメ女の正体』（講談社プラスアルファ新書）、『魂の脱植民地化とは何か』（青灯社）など。

オトナ帝国の逆襲』は、大人たちが過ぎ去った20世紀の夢に心を奪われ、子供たちに破滅的な洗脳教育を仕掛けようとする。それに対してしんちゃんをはじめ

子供の魂の救世主として

めとする「春日部防衛隊」の子供たちは、この映画のキャッチコピーにもあるように「未来はオラが守るぞ」と闘いを挑み、ついには「囚われたオトナたち」を解放する。これは、まさに「高度経済成長」の夢ももう一度、とばかりに、未来の子供たちの環境や資源を先取りし、破壊的成長戦略にとりつかれる現代日本に対する痛烈な風刺であるといってもよい。

海外ではどのように受け止められているのだろうか。私が知っているのはお隣中国の事例だが、中国でも、あけすけな表現、そして子供を制圧しようとする大人たちに抵抗する様子は、これまでの子供向けの漫画の常識を徹底的に打ち破るものであった。

実は中国の子供たちを取り巻く環境は、日本をはるかにしのぐ苛酷さだ。貧富の格差の激しい中国では、なんとか人より拔きんでて、一族ともどもよりよい地位につけるよう大人たちがプレッシャーをかける。しかも一人っ子政策により、一人の子供に両親とその親、計6人の期

待がかかる。そんな子供たちに、クレヨンしんちゃんはどれほど大きな救いになったことだろう。

毎日たぐさんの宿題と、あれやこれやと干渉してくる大人たちにバクハツしそうな気分になっている子供たちに、「こんな息の抜き方もあるんだ」と教えてくれるクレヨンしんちゃん、まさに救世主だ。

ただし中国版のクレヨンしんちゃんは、「ゾウさん、ゾウさん」のシーンでは突然顔だけにフォーカスされ、音声だけは画像、大像」と言うのだが、何をやっているかまったくわからない。同様に、「フリフリ、フリフリ」とお尻を丸出しにして振るお得意のポーズも、映像はカットされ、しんちゃんが枠外に出てしまう。それでも子供たちはなにか強烈なメッセージを感じ取っているのである。

大人社会にがんじがらめにされている子供たちの救世主となったクレヨンしんちゃん。今のような時代にこそ、人々の心を解きほぐしてくれるしんちゃんが必要とされているように思えてならない。

しかも、その脱力した印象と

撮影)

スチ
イ
チを